

スタンフォード大学と私

大阪大学医学部附属病院 柳川 康洋

『今回、海外研修に応募した目的は、今後、自分をスキルアップさせるためには日本国内だけでなくよりグローバルな視野を持つ必要性を感じたからである。最新イメージングシステムの現状を把握すること、さらに、放射線医学領域の最先端を進む米国の放射線診療体制を肌で感じることができれば、自分の今後の臨床業務および研究業務における感性を磨くことに結びつくのではないかと思うからである。また、日本と米国における診療放射線技師の違いを知ること、現在の日本における放射線技師の良いところや悪いところが見えてくるのではないかと思う。是非自分の足で現場に立ち入り、さまざまな事を直接見聞してみたいと思う。』以上が今年4月に応募理由として記述した内容である。

本研修を通して、スタンフォード大学における最先端のイメージング技術を目の当たりにし、画像診断領域の進歩とさらに今後どのような方向に向かうのか見聞できたのは、大きな収穫であった。また、日米における医療体制の違いにも少なからずカルチャーショックを覚えた。日本で過ごす1週間と違い、スタンフォードで過ごした1週間は非常に濃密で一生忘れることができない貴重な経験を積ませて頂いた。私が目的としていた達成度に関しては、充分過ぎる程であったと感じている。

講義・見学における情報集以外に、共同生活を通して(眠い目をこすり肝臓にダメージを与えながら?)他施設の研修生の方々とも交流を深めることができた。多くの方々との交流を通じて、皆様の研修に対する意欲の強さだけでなく、人間性にも大変魅力を感じる事ができた。“隊長”・“組長”・“社長”など様々ニックネームも形成され本当に楽しい時間を過ごさせていただいた。今後、学会を通して研修で出会った皆様と情報収集を重ねてお互いに刺激を与え続ける関係を未来永劫続けていければ幸いだと思う。

今回の研修を通じて、日米間における臨床に関して放射線技師のレベルの違いは感じなかった。日本はアメリカと異なり、業務の分業制は確立されていない。高い専門性を活かして高度な技術を習得し、研究に専念する環境を構築していくことが今後、日本の放射線技師のスキルアップに直結するものと思う。一方で専門化されていないことが職域を広げることにつながる。狭く深く追求していくのか、広く浅く追求していくのか。どちらも一長一短であり、放射線技師の理想像はどのような姿なのか改めて考えさせられた。



Moseley 先生との貴重なツーショット